

3 おねえちゃんないちにち

おねえちゃんないちにち

「舞、ごめんっ！」

目の前で、咲が両手を合わせてる。なんだか、絵でも見てるみたいに見えるなあ

放課後の教室。窓の向こうには帰りがけの子たち。わたしも今ごろ、あの中に混じってたはずなのよね。いい景色のところがあから、って言うってた咲に案内してもらうはず、だったんだけど。

「いいのよ。しかたないじゃない。練習試合なんだから」

グラウンドの方で練習してる運動部の子たちから、わたしはまたすぐ近くに目をやった。まだ頭下げてる咲の後ろに、篠原先生。頭をかきながら、苦笑いしてるわ。

「こおくの不良部員ったら、試合忘れて美翔と約束しちゃってたんだって？ごめんねえ、あたしも監督

できてなくってさあ」

言いながら、指で咲の頭を「コツコツ」ついているの。なんだか先生に見えないな。お姉さん、って感じ。

ああ、先生まで片手でおがんにやって、頭下げようとしてるわ。もう、やめさせなくっちゃ。

「いいえ、気にしてませんから　じゃ咲、わたし先に帰るわね？」

そのまま咲のわきを抜けて、教室の扉から出ようとしたとき、背中から声が聞こえてきた。今度は絶対付き合ってから、って。

ほんとに、気にしてない　よね、わたし。

「広おいなあ」

校門出たとたん、思わず言葉がこぼれちゃった。

学校をひとりですく早く帰るなんて久しぶり。この学校に転校してから、いつも咲といっしょだったものね。

咲がないときだって

あたりをちよつと確認してから、わたしはカバンに声をかけてみた。

「チヨッピ？」

でも、カバンについてるコンパクトは、ただゆっくり揺れるだけ。お昼食べてから、ずっと眠ってるみたいね。

そっか。ほんとに、ひとりなんだ。

春の空が、すこし高くなったような気がする。涼しい、って感じの風に木の葉の匂いが乗っかって、森がいつもより緑に見えてる。

「みどりの里、かぁ」

この町にいと、チヨッピたちがこの世界をそう呼ぶの、よくわかるわ。

「描きたいなぁ」

ゆっくりと、あっちこっちのみどりを見ながら歩

いてみる。やっぱりあの木が一番目にとまるわ。咲と、チヨッピたちと出会った、大きな木。行ってみようかな、ってちよつとだけ思ったけど、でも、なんだか不思議すぎて、いまの気分じゃないのよね。いちばん、いちばんみどりなところ。咲がいれば、きつとわかるんだろっけど

「舞おねえちゃん、なにやってるの？」

え!?

いきなり下から声が聞こえてきた。

びっくりして見おろしたら、ほとんど真下に赤いランドセルとみつあみおさげ。咲の妹さん、みどりちゃん、不思議そうな顔でわたしを見上げてるわ。うわぁ。わたし、またほーっとしちゃってたみたい。もう少いでぶつかっちゃうところだったんだ。

「こ、こんにちは、みのりちゃん。わたしはねえ

いい風景がないか探してるの。絵を描こうと思って、わたしがちよつとだけ離れてからしやがんで言った

ら、とたんに、あつ、て顔したみのりちゃんが、こんにちわって言いながら頭さげた。素直なのよね、ほんとに。

「いい場所だったら、きつとおねえちゃんが知ってるよ。おねえちゃんって」のやまをかけるサル」なんだって。ケンタがよく言ってるもん」

あははは 自分の顔が困った笑顔になってくの、わかっちゃうな。胸はってそんなこと言つみのりちゃん見ると、どう反応したらいいのか、わからなくなっちゃうんだもの。

それにしても、ケンタ 星野くんのことよね？
咲だけじゃなくて、みのりちゃんとも仲いいんだ。ふうん

「舞おねえちゃん？」

あ、いつけない。みのりちゃんが、また不思議そうな顔で見てるじゃない。

「そ、そうね、そうしたかったんだけど 咲ね、きょうはソフトボールの練習試合なんだって。急だった

し、となり町まで行くから、応援にも行けなくって。それで、どこかにいい風景ないかな、って歩いて、た みのりちゃん？」

思わず、みのりちゃんに問いかけちゃった。だって目の前の顔が、笑顔になっていくんだもの。どんどん、輝いてくみたいに。

「それじゃ、みのりが案内したげる！」

え？ わわっ！

わたしは転びそうになるのを、なんとか耐えて立ち上がった。

びっくりしたあ。みのりちゃんが、しゃがんだままのわたしの手をいきなり握って引つ張るんだもの。でも、立ち上がったわたしの手にも、ちっちゃな手がしっかりつながってる。わたしを、引つ張って行こうとしてるのかな？

「おねえちゃん言ってたよ。ミスしたって、みんなでカバーすればいい」って。だから、しよーがないおねえちゃんのミスは、みのりがカバーするの」

ちらっ、と見上げながら言う声が、なんだかとても嬉しそう。わたしは吹きださないように、大きく息吸って、

「それじゃあ、お願いね。みのりちゃん♡」

つないだ手をきゅっ、て握ったら、引っ張ってくれてる手が、少し汗かきはじめてるわ。

ふふふ。それじゃ一日だけ、お姉ちゃんになっちゃおうかな♡

「あれ？美翔さん？」

学校前の坂を降りきつた交差点のかどから、よく聞く声が響いてきた。

メガネに二つしばりのおさげ。大き目のカバンにはいつでも絵本。クラスメイトの、安藤さんね。

「たしか、日向さんと一緒に、絵を描きに行くって言うてなかったっけ？」

いやみな人じゃないんだけど、けっこう細かいことにごだわるのよね。だからたま〜に、ツッコミたくなっちゃうの。

「ええ。だから、ちゃんと帰ってるでしょ、日向みのりちゃんと」

引かれてない手をみのりちゃんの肩に乗せて、いっしょになって安藤さんを見上げたら、少しのあいだ、口ばくばくしてた。成功 かな？

まあ、やりすぎはよくないわよね。

「咲が用事できちゃって。妹さんのみのりちゃんに、いい風景を案内してもらってるのよ」

安藤さん、ちょっとだけムスっとしてたけど、ひと呼吸ついたと思っただけ普通顔にもどっちゃった。

さすが、小さい子に慣れてる人は違うな。

「なんだ、それならちょっと言うてくれれば、私が案内したのに あ、よければいまからでも案内するわよ？」

7 おねえちゃんないちにち

きゅ　　っ

安藤さんの言葉が終わる前に、わたしの手が、痛いくらい握られた。

いまはお姉ちゃんなのに　信用ないんだなあ、わたし。

「安藤さんは、図書館に行かなくちゃ。みんな、待ってるんでしょ？」

言いながら、わたしは空いてる手で、ちょっと指さしてみた。

そしたら安藤さん、すくばっ、と後ろ向いて、

「そう？ それじゃ、また明日ね」

そっけなく言って、そのまま歩いて行っちゃった。

重そうなカバンかかえて歩いてく安藤さんの姿が、だんだん小さくなってく。わたしはしばらく、そのまま見送ってた。

きゅ　　っ、もうそろそろ、かな？

そう考えながら、つないだ手を意識してたら、い

きなりその手がくいつ、て引っ張られた。うん。きたきた

ゆっくり下を向いたら、みのりちゃんがじっとわたしを見上げてる。心配そうな顔で、じいっと。

「あのおねえちゃんじゃなくて、いいの？」

わたしはすぐにしやがんで、まっすぐ目を合わせてあげてから、

「安藤さんは、みのりちゃんじゃないでしょ？」

わたし、今はみのりちゃんに案内してもらいたいの。ね？」

目の前の顔が真っ赤になるの、わたしはそのままじいっと見つめてた。

「うん！」

咲とおんなじ。ほんと、まっすぐな子なんだわ。

だから、わかるのよ。次になに心配するかって。

「安藤さんならだいじょうぶ。みのりちゃんの気持ち、ちゃんとわかっているから」

え？　って、びっくりした顔のみのりちゃん見てる

と、思わず顔がほころんじやう。なんでわかるんだろう、なんて思ってるんだろうな。

でも、そんなの簡単。だってさっきわたしが指さしたら、すぐOKサイン出してくるんだもの。髪なおすぶりなんてしながら。

わたしはただ、みのりちゃんと繋いだ手を指さしただけなのに、ね♡

「はい、とうちゃくです」

森に囲まれた小さな公園で、みのりちゃんの両手が上がった。

「うん？」

わたしは思わず、ヘンな声出しちゃった。みのりちゃんの好きな公園に行くんだとばかり思ってたらずう公園なんだもの。

でも、みのりちゃんは思いつきりうなずいて、

「うん、ここだよ。けしきだったら、こっちの方がずっといいんだ」

ああ、そっか。気をきかせてくれたのね。

どこにでもありそうな公園だけど、森の中にあるせいか、乗り物もなんとなく緑のにおい。うん、これなら、みどりが描けそう。それじゃ、スケッチブックを取り出して、と

「あ、まってまって。一番いいところ行くから。」

この森の奥にね、あたししか、知らないところがあるの」

カバンの中をさがしてた顔を上げたら、みのりちゃんがひとり公園の奥に歩いていった。急いで追いかけたけど、なにかへん。なにか引つかかっている。

なにが あー！

「みのりちゃんしかって、咲も知らないの？」

木でできた公園の柵。ちよっとだけ壊れてるところをくぐって、みのりちゃんが森に入っていく。

「おねえちゃんはさ、ここ来ちゃだめだ、って」

わたしは柵を乗り越えながら、考えた。

来ちゃダメ。咲が、みのりちゃんに、来ちゃダメ

「ちよつと待って、みのりちゃん。どうしてダメか、聞いてみた？」 あ痛っ！「

みのりちゃん捕まえようとしたけど、腰が引っ張られて動けなかった。乗り越えるとき、柵にスカートが引っかかっちゃったんだわ。

「聞いたけど あぶないから、ダメって」

きよとん、つてしてるみのりちゃん見ながら、わたしは思わずのど鳴らせた。

あぶないから？ とにかく、これ以上先に進ませちゃダメだわ。いまのわたしは、お姉ちゃんなんだから。

「ね、みのりちゃん、別のとこにしよう？」

できるだけ、落ち着いた声だしてみたけど、顔がこわばってるのが自分でわかる。

焦っちゃだめ、だめなんだだけ ああ、なんで柵から外れないの！

「だいじょうぶだよ。おねえちゃん、怖がりなだけなんだもん。

ほら、この木。ここの裏っかわに回るとね 「待って、みのりちゃん！」

早く、早くみのりちゃん捕まえなくちゃ。もう、このスカート ツ！！

「ほおら！ あれ？」

「みのりちゃん！！」

くらっ、て、木の向こうに倒れるように消えてくみのりちゃん見た瞬間、わたしは跳んだ。

ほかのことなんて、なにも考えられなかった。

ゆらゆらって、なにかゆれている。

もう、朝なのかな。おかさんが起こしてくれてるの？

うっん、ちがう。

「おねえちゃん、舞おねえちゃん」

声。ちっちゃくて、ないてる声。

ないてる　泣いてる？

「舞おねえちゃん！　気がついた!!」

ぱっと目を開けたとたん、目の前いっぱい顔があつた。くしゃくしゃの、みのりちゃんの顔が。

「けが、ない？」

言つたとたん、目の前の顔がぶんぶんうなずいた。

痛そうな顔してない、か。ふう、ちよつとだけ安心ね。

ばさばさになつちやつた髪をとかしてあげようとしたけど、腕が動かない。変たなつて思つたけど、よく見たら腕の中にみのりちゃんがいるわ。とっさに抱きかかえちやつたんだ。よかつた、間に合つて。

ちよつとだけ体を動かしてみたら、なんだかチクチクする　けど、やわらかい地面に乗つかつて、別に痛いところもないみたい。

首をちよつと動かしたら、さつき見た大きな木。なんだ、その場で転んじやつただけだったのね。わた

しひとりあんなに慌てちやつて、バカみたい。

みのりちゃんを抱えたまま立ち上がろうとしたら、なんか足元が変な感じ。地面がすっこくやわらかいの。まるで、土じゃないみたい　ええっ!?

地面にすぎ間があいてて　ずっと下に見えるの、あれって、森!?

そっか。大きな松の木の枝に、いっぱい葉っぱが積もってるんだわ。だからこんなやわらかいんだ

わたしはそのまま、ゆっくり木の方に歩いていて　足が固い地面に触れたとたん、座り込んでいた。ぺたん、つて。

「おねえちゃん！　舞おねえちゃん、どこかいたいの!？」

ああ、みのりちゃんの声、なんだか遠くからに聞こえるなあ。ここでちよつと眠つていきたいくらいだけど　そもいかないわ。早く、戻らなくっちゃ。とにかく、立ち上がつて、と。

「大丈夫よ。さあ、行きましょ」

そのまま今度はわたしがみのりちゃんの手を引いて行こうとしたけど 手が、動かない。あら？

「おねえちゃん、あれ！」

振り向いたわたしの前で、みのりちゃんがまっすぐ指をさしてた。

みどりの、ひかり。

松の葉っぱに夕日がさして、きらきら、きらきら。まるでみどりの氷みたい。そのまま見るより、ずっと、ずっと、みどり。

「きれい」

「でしよでしよ！舞おねえちゃんなら、そう言うと思っただ。おねえちゃんも、きつと気に入るだろうなあ、って言ってたもん」

にこにこ顔のみのりちゃんと、指さす先を、わたしの目が何度も往復した。

ほんと、きれい。でも。

「行きましょ。みのりちゃん」

引かれる後ろ髪を振り切つてから、ぎゅっと握った手を、わたしは引つ張つた。

「ま、舞おねえちゃん？」

公園の壊れた柵を乗り越えて、

「絵、かかないの？」

公園の入り口を抜けて

「舞おねえちゃん!!」

手にみのりちゃんがぶら下がって来たところで、わたしはちよつと立ち止まった。

わかるのよ、わたしにも。なにかしてあげたい、つてこと。なにかできるのが嬉しい、つてこと。

「みのりちゃんにケガさせてまで、描きたい絵なんてないわ」

まっすぐ見て、ゆっくり言つたつもりだけど、見上げる腫がおびえてる。何年か前の、わたしの姿を見てみたい

気がついたら、わたしはみのりちゃんの頭をなで

てあげてた。

「でも、ありがと。みのりちゃん」

抱きついてきたみのりちゃんをなでながら、わたしは思わずため息ついちゃったわ。

「わたしってやっぱり、お姉ちゃんに向いてないのかな」

「たっだいまあー！」

家中に響く声の後から、とたとた駆けてくる足音が近づいてきた。

咲の部屋の中では、ちっちゃなくすくす笑いがあった。みのりちゃんといっしょに息をひそめてると、それだけでなんだか楽しくなっちゃうな。

あ。足音がもつすぐそこよ。ドアが開くまで、

2、 1

「おかえりなさい、おねえちゃん♡」

開いた瞬間にふたりで言ったら　うふふ。咲っ

たら、部屋のドアを開けた姿で固まっちゃったわ。成功成功。

「な、なんだ、舞、来てたん」

みのりちゃんと右の手のひらパチン、って合わせて喜んでる途中で、いきなり咲の声が聞こえなくなっ
た。あらっ？　と思っって振り向いたら　なんたる
う、咲がへんな顔してる？

「どうかしたの？」

わたしがそう訊いたとたん、ちよっとだけむすつ
としてた咲の顔がもとに戻った。

「ううん、なんでもない。　あ、ほーら、みのり。まーた汚してぎちゃってえ。お風呂はいっちゃいなよ。あたしもあとから行くからな」

言われてみのりちゃんは着替え持って部屋を出てっ
たけど　なんだろう、このへんな感じ。まるで、部
屋からみのりちゃん追い出しちゃったみたい。

でも、咲がそんなことするわけ

「ところで、と。ま〜いちゃん」

体が思わずびくつ、てなつた。

「な、なに？　へんな声だしちゃって」

猫なで声つてこういうのかしら。なんだかものす

ごく企んでる声だもの。

さっきの仕返し？　でも、わたしだけ残してついでうのもおかしいし

「そこ。スカートのすそ、やぶけてるよ」

ええっ!?

「こ、これね。絵を描こうとして、ちょっとへんなとこ座っちゃって　な、なに!？」

やぶれたスカート、おしりの下に隠そつとしたと

こに、咲の手がぱつ、てのびて来た。

「これ、な〜んだ？」

え？　ああ、松の葉っぱ？

「この辺ねえ、葉っぱの大きな木ばかりで、松つてないんだよ。あ、公園にしが、ね」

あの公園　ああっ！

「こ、これはね、そ、その、ええと」

ああ、なんだか頭が混乱して、うまく言葉にならないわ。いつもならすぐ出てくるのに、もっつ！

「　　ありがとね、舞」

え？

わたしは一瞬、なにが起こったのかわからなかつた。目の前で、咲が頭下げてる。テーブルに、くつくくらい。

「みのりがさ、連れてつちやったんでしょ？　つたく、行っちゃダメだ、つて言つたのに」

ぼけつとしてたわたしの目が、その一言ではつと覚めた。

「咲！　みのりちゃんは　」

思わず腰が上がつちゃうわ。ダメよ、咲。いまみのりちゃん怒つちゃ。いっくらお姉ちゃんでも　！

「わかつてるつて。舞がちゃんと怒つてやつたんでしょ。なら、それ以上言わないよ」

あ、あれ？　怒らないの??

わたし、その場にかくん、ってひぎついちやった。
お姉ちゃんな咲なら、きつと怒るだろって思っ
たのに

「でも！ ひとりで行っちゃダメだかんね、舞
ん？」

「舞って、絵を描くこと考え始めるとまわり見えな
くなっちゃうんだもんなあ。あたしゃ心配だよ」

ちよ、ちよと待って？

「まあ、まかせなさいって。行くときは、あたしが
ロープで落ちないようにしたげるからさ」
これって、もしかして

「だから、ひとりで行くんじゃないよ。ね！

それじゃ、おやつ持ってくるから」

あらら。言うだけ言って、そのまま部屋出てっち
やった。

「ふふふふ」

思わず、笑いがこみ上げてきちゃう。そうか、あ
れなんだわ。

「あははは」

そう、あわがお姉ちゃん、ってことなのよ。

「あははははは あ〜あ」

いつでも、どこでもお姉ちゃん、かあ。

「ふう。ほんとに遠いなあ 『お姉ちゃん』って

—おしまい—